

大会講演記録

王鞍延子

本日は、このような立派な歴史のある会にお招きいただきまして有難うございます。ご立派な方々の前でお話させていただくことにとっても緊張しております。

私は、慶應義塾大学の通信教育の卒業論文に鈴木商店のことを取り上げました。ここで鈴木商店の歴史について、簡単に述べさせていただきますと思います。

明治七年、鈴木商店初代鈴木岩次郎が、兵庫の弁天浜に洋糖引取商として発足し、神戸辰巳屋、扇鈴木商店と称した。煎餅を焼いて売ったりして、繁盛すると共に、洋銀両替商としての看板も掲げて、居留地貿易、商館取引にも参加した。岩次郎は洋糖商会や石油商会も設立し、外商の価格吊り上げを防止した。その頃柳田富士松や四国から入った金子直吉は徒歩にて明石、姫路、までも砂糖の売りこみに行った。明治二十七年、初代岩次郎の死後店主鈴木よねとして事業を継続することになった。樟脳は金子、砂糖は柳田が担当した。

初代台湾民政長官後藤新平は、台湾の貴重な樟脳と砂糖をどう国益に結びつけるかと思案していた折、金子は製脳官宮論に賛成し、樟脳の六五%の販売権を手に入れた。さらに、販売と同時に精製にも乗り出した。明治三十五年鈴木商店は資本金五十万円の合名会社となり、金子、柳田を中心に砂糖精製に乗り出し、九州の大里に進出し、

関係の利益は吹き飛んだが、砂糖、小麦においては大躍進をしている。大正九年資本金五千万円に増資した。大正九年、西川文蔵の死は鈴木商店そして金子にとっても大打撃であった。西川は金子が積極的で拡大、独断専行の趣があったのを周到さと緻密さで補足した。さらに、学卒者、店員らの間をうまく仲介して和を図った。近代的経営を唱える高畑らに同調しつつ、近代的経営への変革を考えていた。彼の死はそれぞれの立場の人々にとって、非常に残念であり大きな損失であった。大正十年以降、明らかに鈴木商店の財政は悪化の道をたどる。しかし、さらに多角経営は増していく。帝人の事業についても、金子は利益を上げるまでずっと待ち、日本で衣料の原料の製造の重要さを第一と考えていた。金子の考えの根本をなしている一つは国益の向上であった。しかしながら戦後の不況、軍縮、関東大震災など状況が悪化していった。

大正十二年資本金八千万円で株式会社鈴木商店設立、持株会社である鈴木合名と分離された。金融恐慌の直前には、鈴木商店の子会社、関係会社は70社以上あり、これらの払込資本金の合計は三億五千万円を超えていた。資金調達方法は、主に台銀からの借入れ金に頼っていた。台銀の貸出高は五億四千万円で預金高は九千三百万円であった。台銀は鈴木への融資が限界にきたとして昭和二年三月融資打ち切りを通告し、四月二日に鈴木商店は倒産に至った。

『昭和神戸産業経済史』によると、戦前戦後を通じて神戸市内の一企業の行動が、日本経済全体にこれほど大きな影響を与えたことはない。もし、鈴木商店の倒産が無かったら、その後の神戸経済の歩みにどんな違いが生じていたであろうかを、思わずにはいられない……と述べている。

苦労を重ねた末、生産が軌道にのった。名声が上がった頃、大日本精糖に大里製糖所を売却し、一手販売権を獲得した。明治三十八年、鈴木商店は脇浜の小林製鋼所を買収し、神戸製鋼所として発足、製鋼所はいろいろ苦労を重ねながら、明治四十四年鈴木商店から分離独立後、鈴木商店が全額出資の資本金百四十万円の株式会社になった。明治四十二年鈴木は神戸に六つの直営工場を持ち、支店二ヶ所、出張所八ヶ所を有した。明治四十二年、輸出入部門への進出を狙って、日本商業を設立し、船舶部も誕生した。

大正三年七月、第一次世界大戦が勃発すると、金子は、十一月に「世界の商品、特に軍需品は必ず暴騰する。鈴木信用と財産を十分に利用して、めくら減法まっしぐらに買い進め」という一斉買い出動を出した。鉄は上がり、船舶を発注した。ロンドンの高畑誠一は大英帝国政府と連合相手は大活躍をした。大正六年には、鈴木商店は年商十五億四千万円で三井物産を抜いた。金子の積極的経営と拡張戦略の結果であった。大正七、八年頃の多角的事業の企業は五十数社であった。戦局が拡大し船舶不足が生じてきて造船界へ注文が殺到した頃、英米が日本への鉄資材輸出禁止してきた。業界の死活問題であり、金子は米鉄解禁運動の総帥として業界の為、国の為に活躍した。

その頃戦争による成金の出現により貧富の差は拡大し、米騒動が大正七年夏神戸に発生し、鈴木商店は焼き打ちされた。鈴木商店が焼き打ちされた理由はいろいろあるが、金子は国の為の米の輸出入、移入をし、何も悪いことをしていないという気持ちを持ち続けていた。米騒動から3ヶ月後、米穀部の永井幸太郎が「米騒動と鈴木商店」という論文を発表し、世間の誤解を解く努力をしている。

大正六年、貿易年商日本一になった鈴木商店は、休戦後大正八年船

金子の経営理念は、国益志向の事業展開であり、資源の少ない日本が世界の中でやっていくには工業化による製造業を基本にして、商売をしていくという考え方であった。創造的企業家金子直吉の才能は稀有なものであった。永井幸太郎の次の言葉が印象的である。

「金子直吉翁は死んだが、残した事業のなかに今日もお生きていく。残した多くの事業をはらんだ母体である鈴木財閥は、その子会社がのおの発展自立して、一応成人の時期に達したため、自然独立分離し、従って母体が解体するという現象を呈したにすぎない。これはすべての生物にまぬがれ得ない運命であり、細胞分裂がその生物にとって発展的現象であるのと同様である。」

